

神の水

「ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ。」

「ぶはーっ、うまい。」

あの夏、僕は家族と緑生い茂る雄大な自然の大地、北海道に来ていた。

その日は、青空に入道雲が映える夏らしい天気だった。

朝からニセコアンヌプリに登った。ゴンドラを降りると、

目の前には「蝦夷富士」とも呼ばれる羊蹄山がそびえ立っていた。

緑をまとい、その名の通り富士山のような美しい姿をしていた。

「あそこまで行こうよ。」僕の一言で、次の予定が決まった。

僕らは羊蹄山を目指してサイクリングを始めた。

そこには、僕の住んでいる関東では到底見ることができない景色が広がっていた。

長く真っ直ぐに続く道、端が見えない広大な畑、遮る物が何もない空、全てのスケールが違っていた。

そして、夏の強い日差しに照らされて、きらきらと輝く美しい川も流れていた。

橋の上からでも川底がくつきりと見えていた。

「こんなにきれいな水は、どこから流れ出しているのだろうか。」

僕はふと疑問に感じた。

昼も過ぎ、手持ちの水も尽きた頃、ようやく羊蹄山の麓にたどり着いた。

水分補給のため自動販売機を探していると、「羊蹄山の湧き水」の看板が目にとまった。

水の流れる音につられて行ってみると、岩肌のおちらこちから勢いよく水が湧き出していた。

次々に地元の人が来て、水汲み場でポリタンクやペットボトルに水を入れていた。

僕らもそれを真似し、空になったペットボトルに水を汲み一口飲んだ。冷たい湧き水が、

からからの喉に染み渡る。残りの水も一気に飲み干す。

「ゴクツ、ゴクツ、ゴクツ。」

「ぶはーっ、うまい。」

思わず僕は、ビールの宣伝のような台詞を発した。新鮮で驚くほど美味しい水だった。

この羊蹄山の湧き水は「カムイワッカ（神の水）」と呼ばれ、

羊蹄山に降った雨や雪解け水が数十年の長い年月をかけてる過され、

カルシウムやマグネシウムなどのミネラル成分をたっぷり含んだ水となって湧き出しているそうだ。

ここで先ほどの僕の疑問は解消された。この雄大な羊蹄山が、あのきれいな川の水を生み出していたのだ。

僕は気付いた。緑豊かな山々からの水の恵みが、美しく自然あふれる北の大地を育んでいたのだ。

そして、この大地に生きる様々な動植物の生命を支えているのもまた、美しい水なのだ。

大自然と共に生きてきたアイヌの人々には、きっとそれが分かっていたのだ。

だからこそ「カムイワッカ（神の水）」と呼んだのだろう。

僕たちも、アイヌの人々の自然を敬う精神を見習い、

この豊かで美しい自然を守り、

次の世代に繋いでいく努力をしなくてはならないと思った。



印西市立木刈中学校 一年

宮島 諒

絵

市村 淳一